

# 蔵浜大学出版会

|                    |   |
|--------------------|---|
| Title              | 「特別」に関する予備的考察   |
| Author(s)          | ふおん   |
| Citation           | コネクト第四巻 (CONNECT Vol.4) pp.4-10   |
| Issue Date         | 2019.03.09  |
| Last revision Date | 2019.09.12  |
| Doc URL            | <a href="http://kuradai-repo.fuon.jp/kup-0006.pdf">http://kuradai-repo.fuon.jp/kup-0006.pdf</a> |
| Type               | article   |
| File Information   | KUP-0006  |

Instructions for use

# 「特別」に関する予備的考察

---

特別とは何か。

小説『響け！ユーフォニアム』<sup>1</sup>シリーズ（以下、『響け！』と称す）では頻出する言葉であり、作者である武田綾乃氏も、2017年12月16日放送の「BravoBrass」内にて、『響け！』の裏テーマが「特別になりたい」<sup>2</sup>であることを発言していることから、この「特別」という言葉、ないしは概念は『響け！』の中核を成していることが伺える。

ところで、この特別という言葉、どんな意味なのだろうか。

広辞苑によると、特別とは、「普通一般とちがうこと。特に区別されるもの。」とされており、前者は**普通・一般と言ったごくありふれたものの対概念（非普通）としての「特別」**であり、後者は**数多あるものの中の1つ（あるいは限定したもの）をその他とは別のものとして認識された「特別」**であり、2種類の特別が存在していることが分かる。

後者の特別であれば、対象を他と「特に区別する」という認識さえ

---

<sup>1</sup> 武田綾乃『響け！ユーフォニアム 北宇治高校吹奏楽部へようこそ』宝島社、2013 など

<sup>2</sup> 「このシリーズの裏テーマとしてはやっぱり「特別になりたい」ってのがキーワードになっているので、ユーフォシリーズそのものが、誰かにとって「特別」になれたらいいなと思っています。」（※注：放送での対話形式での発言を、筆者がまとめたもの。）

存在すれば良いのであるので主観的なものだが、前者の特別の場合は、対象が普通・一般とは違うという裏付けのある、誰から見ても普通・一般ではないことが理解出来る、客観的なものである。

また主観・客観を問わず特別には、比較し得る他の存在が必要であり、複数（もっと言えば多数）の存在が「特別」という概念を生み出していると言えよう。

#### ・客観的な特別

対象を普通・一般とは違うもの、それを客観的に特別と言う際には、多くの場合数値や可否などのデータによって示され、対象の数値が平均値より群の抜いて高い場合、あるいは他と比較して可能であることが圧倒的に多い場合には、その対象は特別であると言える。

#### ・主観的な特別

対象を特に区別するという認識は、特別であると評価する者の内心に存在する価値によって判断され、対象が雑多な集合の他のものよりも好ましいであるとか、美しいであると感じた時に、対象が特別であると認識される。

主観的な特別は、各評価者（自己）の価値に依存しているため特別を共有出来る可能性は低く数も少ないが、対して客観的な特別は、データが自己だけではなく他者も参照可能であれば他者も特別と認め得る（価値が自己ではなく外部にあり共有しているため）ので、特別が共有される可能性が高く、主観的な特別に比して数も多い。

主観的な特別は集合の1つを自己の認識により特別としている、集合の中にある特別であるが、客観的な特別は普通・一般から切り離された、あるいは（客観的な）特別から普通・一般を切り離した、孤立した特別である。

|     | 価値    | 評価方法    | 共有度   | 位置    |
|-----|-------|---------|-------|-------|
| 客観的 | 外部・共有 | データ（数値） | 広い・多数 | 孤立    |
| 主観的 | 内心・固有 | 自己の価値観  | 狭い・少数 | 集合の1つ |

#### <特別の特性>

客観的な特別と主観的な特別を整理したところで、今度はこれを人間の社会に当てはめて、対象を人間として考えていきたい。

ある人間（A）を特別と捉えた時、自己の価値基準に基づき A を特別と認識していれば、それは主観的な特別であるが、A を自己が属する社会の価値（成員に共有している価値）に基づいて A の能力や特徴を数値として算出し、そのデータに基づいて A を特別とするならば、それは客観的な特別である。主観的な特別では、自己以外に A を特別だと認める人間は少ない（同じ価値基準に基づくのはほほいないだろう）が、A を社会の中の1人として特別を認める行為である。対して客観的な特別では、社会に属する普通・一般の人間が、共有された社会の価値基準に則っているため、成員のほとんどが A を特別と認めて

いるが、大多数の特別ではない、普通・一般の人間たちが、A を「特別」とラベリングし、特別という枠に押し込めて、あたかも社会の中の普通・一般から切り離す行為であり、「特別」とされた側から見れば、普通・一般の人間から、「特別」であることを理由に、同じ社会に属するものの切り離され、孤立させられる行為である。

「特別」は他の存在を必要とし、対象が人間であれば社会の存在が必要不可欠であるが、社会の価値基準（客観的な価値）によって対象を「特別」とすることは、対象をラベリングする行為であり、それは「特別な人間」とそうではない、普通・一般の人間を切り離し、「特別な人間」を社会の中で孤立させる行為である。

『響け！ユーフォニアム』においては、「特別」に関係する人間が何人か出ているが、時制ごとに見たいため、田中あすか（現在）と高坂麗奈（未来）に加えて、作中において特別とまでは言及していないもののそれに近い存在として斎藤葵（過去）の三人に触れておきたい。

### 「である」：現在

田中あすか：高校・吹部という社会における評価（学力、演奏力）による、客観的特別。

「あすか先輩は特別やから」（中川夏紀 1巻 p.211）

### 「なる」：未来

高坂麗奈：「称賛されたい」客観的特別？

「アタシはさ、特別になりたい」、「他人から称賛されたい。ほかのや

つらと同じって、思われたくない。」（1巻 p.203）

コルネット<sup>3</sup>ソロにおける、吉川優子との対立において、度々「上手いから」と発言、また吹奏楽コンクールに対しては結果（成績）を重視しており、彼女の特別観は外部にあるものとする。

### 「だった」：過去

斎藤葵：中学校時代の「勉強も部活もできる」客観的特別。

しかし、高校では特別にはなれなかった。通用していた社会からの退出と、参加した新しい社会における別の特別な存在（田中あすか）の出現による。

田中あすかは、北宇治高校吹奏楽部の中では「特別な存在」として描かれているが、自認はしておらず、むしろ周囲が彼女のことを特別視し、小笠原晴香の発言にある通り「うちらが勝手にあの子を特別にしてた」（3巻 p.80）のである。しかし、特別になりたい高坂や特別だった（だと思っていた）斎藤は、特別である（ありたい）ことを自認しており、特別であるが自認はしていない田中とは好対照である。

しかし、なぜ彼女らが「特別」になりたいと思うのだろうか。「特別」という概念を生み出している背景には比較し得る多数の存在、つまり社会の存在があるが、彼女たちが属している社会とはどういったものだろうか。

彼女たちが所属している社会は数多く存在し得るが、最も身近な社会は「高校」という社会である。

高校という社会は、入試において偏差値で輪切りにされた学力が似

---

<sup>3</sup> 原作における。アニメではトランペット。

通った、ほぼ同じ出身地で、さらに年齢を同じくする非常に同質な人間が集まったものであり、その同質な人間たちが入学後も絶えず定期考査や模試の点数で学年、学級で順位づけられ、部活内においても技能の優劣によって序列づけられ、学校側が順位付けしなくても、生徒側において順位付けしやすい環境にある。他人とデータという客観的価値基準によって「特別」が非常に意識・形成されやすい特殊な環境下にあり、それ故に「特別になりたい」という欲求が起こり、また「特別な人間である」と他者をラベリングするのである。

「特別」というものを普通・一般の対概念として捉えたと、その「特別」と称賛してくれる人間の多さから普通・一般の人間から見ると羨望の対象となり、時として目標ともなり得るが、同時に「特別」たる他人を普通・一般から切り離して孤立させ、「特別」というカゴに押し留めるものである。そして、その「特別」は社会に価値を置いているため相対的であり、また参加する人間が入退出し社会が変化すればたちまちに「特別」ではなくなるなど、非常に不安定な存在である。

しかし、「特別」には、対象を他と「特に区別する」認識という、個人が内心に持つ価値、個人の主観によって決定づけられる「特別」も存在している。人間であれば「特に区別される」可能性があるものは個性であり、それは他者の認識によって特別になり得る。

個人の認識からくる特別は非普通・一般としての特別と比べて、共有されにくく称賛の対象とはなり得ないが、流動的な社会と比べて、個人の価値（観）は変化しにくく、結びつきも強いものである。また、能力の優勝劣敗によって決まるのではなく、誰にも可能性があるものである。

特別とは何か。辞書的な意味では「普通一般とちがうこと。特に区

別されるもの。」であり、前者で捉えれば客観的なもの、後者であれば主観的なものに分類される。客観的な特別は特別であることを広く共有されるが、同時に普通・一般から切り離され、社会の中で孤立することでもある。であるからして、真に特別と言えることとは、自己が誰かの特別であることであり、そしてそれが相互的であることである。

## 補記 (2019.09.12)

怪文書こと「『特別』に関する予備的考察」ですが、書いている本人も書き終わって読み返した時に「なんなんけこれ」ぐらいに思っますので、(どうかと思うのですが) 多めに見てやって下さい。ただ、C93 (2017.12) の時に出した『コネクト Vol.2』の「あとがき」に書いた、「裏テーマである「特別になりたい」とは一体何なのか… (中略) …「特別」である、「特別」になることとは何か」という疑問に対して、自分なりの考えを出せたのは良かったです。少し肩の荷がおりた気がします。

さて、『響け！ユーフォニアム』の最終楽章の発売日と、若干のあらすじが公開されました。どういった結末を迎えるのか。個人的には音楽に対する価値基準の違い、麗奈の「特別になるための手段 (ツール)」対緑輝の「音楽を楽しむ」がどう決着されるのか、また武田先生が思う、「特別 (になること)」とは何か、そして、北宇治高校の制度・システムについて新たな記述があるのか、それらについて気になることがとにかく多く、4月が待ち遠しい。

(コネクト第四巻「あとがき」より抜粋)

※この記事は最終楽章発表前の 2019 年 3 月 9 日時点のものになります。